

《令和六年度 暗唱②》

へいけものがたり
平家物語

ぎおんしやうじや
祇園精舎の
かねこえ
鐘の声、

しよぎやうむじやう
諸行無常の響きあり。

しやらそうじゆ
沙羅双樹の
はないろ
花の色、

じやうしやひつすい
盛者必衰の
ことわり
理を
あらはす。

ひと
おごれる人も
ひさ
久しからず、

ただ
唯
はるよめ
春の夜の夢のごとし。

もの
たけき者も
ついで
遂には
ほろびぬ、

ひとえ
偏に
かぜ
風の前の塵に同じ。



【現代語訳】

祇園精舎（古代インドの須達長者が、仏陀のために建てた寺院）の寺の鐘の音は、すべてのものが移りゆき滅んでいくという「諸行無常」の響きをもっている。

沙羅双樹（仏陀が亡くなったところに生えていた木）の花の色も、栄えた者はいずれ必ず滅びゆくという「無常」を示している。

今、驕っている者もその隆盛の時期は長くない、ただ春の夜の束の間の夢のようなものだ。

強力に見える人間も最後には滅びてしまうのだ、

ただ風の前で吹き飛ばされていく塵のようなものに過ぎない。